

祭り囃子への印象評定に地域特異性はみられるか

畑 山 俊 輝¹・金 地 美 知 彦²

要 旨

本研究は、「八戸えんぶり」お囃子音楽の心理学的効果が他地域の「祭り囃子」や、その他の音楽といかに異なるかを明らかにしようとした。本研究が先の研究（畑山ら、2009）と異なるのは、先の研究で「えんぶり 1」とした曲 2 を大館神明社例祭の「剣囃子」に変えたことである。対象者は、大学生 81 名（男性 63 名、女性 18 名、年齢 18 歳～32 歳）であった。彼らに、イメージを言いあらわす 21 項目の形容詞語からなる印象評定票に、音楽聴取時にそれぞれの尺度の形容詞語で描かれるイメージの程度を尺度上に記すよう求めた。祭り囃子の 2 曲を、バロック音楽 2 曲と比較した。結果は次のようであった。祭り囃子の曲同士には、印象評価値をもとに算出した Spearman の相関係数値が極めて高く、相互によく似た印象を評価者が描いていることが分かった。また、楽曲 3・Badinerie は 2 つの祭り囃子とよく似ていて、横笛が祭り囃子をポジティブに評価するのに大きい役割を果たしていることが推定できた。また、「えんぶり」評価が、特に八戸地域出身者で大館の「剣囃子」よりも高かったことは、生まれ育った地域の祭り囃子に比較的特異的な反応を喚起する仕組みとして音楽の「こころの理論」が形成されていることを示唆した。

Key Word：八戸えんぶり、祭り囃子、音楽印象評価、横笛

はじめに

本研究では、八戸市の重要無形民俗文化財の「八戸えんぶり」を主としてとりあげ、その祭りのお囃子の音楽が地域の人々にいかに受け容れられ定着しているか、その心理学的な効果を検討しようとしてきた。日本の祭りには地域の多くの子供たちが参加し、そこでのお囃子は子供たちにとって身近な響きとして定着する重要な役割を果たしているように思われる。発達初期の過程で耳にする調べが受け容れられやすい背景には North and Hargreaves (2008) が示唆するように、おそらくその生物学的な基礎があるからであろう。Deutsch (2010) も同じく、歌と言葉の発生の背景に共通の遺伝的基盤のあ

ることを示唆した。Stevens & Byron (2009) は、音楽の構成やならわしが暗々裏に理解できるようになるのにはただ特定の音楽的環境に触れるだけでよく、たいていそれは幼児や児童の頃に可能であること述べている。このような考えからすれば、家の中で乳幼児が耳にする調べや言葉、さらにはそれぞれの地域の伝統芸能や祭りの調べは、地域の人々に比較的特異的な形で音楽に対する基本的なコンセプト形成に影響していると考えられることができる。著者ら（畑山・金地・深澤, 2009）はそのようなコンセプトを「こころの音楽理論」と呼ぶこととした。

「八戸えんぶり」は二月中旬に、豊作を願って主に‘舞台’で行われる祭りである。祭りでは、田植え前の土ならしのしぐさを取り入れた神事としての舞いと、いくつかの余興芸能とが披露される。その際、祭りを引き立て盛り上げるの

¹ 八戸大学人間健康学部・教授

² 八戸大学人間健康学部・助教

が笛や太鼓のお囃子音楽である。先の研究（畑山ら，2009）で述べたように、お囃子の音楽に関しては今日あまり一般には関心を持たれてはいないと言えよう。それはおそらく起源の古いお囃子にあっては長い時間の経過の中でさまざまな音楽が生まれ、当初のお囃子音楽の魅力が薄らいだためであろう。しかし、伝統芸能として長年地域に受け容れられてきたことを合わせ考えれば、その魅力は失われたのではなく、むしろ抵抗なく人々の心の中に内潜してきたのではないかと思われる。そうであれば伝統芸能のお囃子音楽という、一見古風で顧みられることのない音楽であっても、地域の人々にとっては幼い頃から耳にしているなじみの響きとして心にプラスに作用しているものと推定できる。実際、これまでに得た我々の結果はそれを裏づけているように思われる。

我々の研究では曲調の異なる「えんぶり」2曲をバロック音楽2曲と比較させるようにして曲間の違いを調べた。対象者は、大学生44名であった。彼らに、イメージを言いあわす21項目の形容詞語からなる印象評定票に、音楽聴取時にそれぞれの尺度の形容詞語で描かれるイメージの程度を尺度上に記入するよう求めた。その結果、「えんぶり」の曲同士には印象評価値を基に算出した Spearman の相関係数から、極めて高い類似性が見られた。また、「えんぶり」の楽曲1と「Badinerie」と類似性は高く、「えんぶり」の楽曲2と「Badinerie」とでは、類似する傾向が見られた。要するに、曲調が異なっても「えんぶり」同士は同じように受け止められていることが推定された。また、それらが喚起するイメージとしては、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」などの形容詞語と関係していた。このことは、伝統的な「えんぶり」のお囃子にポジティブな効果が認められることを示した。他方、2曲のバロック音楽は被験者には聴いたことのない、なじみのない音楽であり、そのことがポジティブ評価を低くしていると考えられたが、興味深いのはフルートの小品、

「Badinerie」はポジティブ評価が「えんぶり」ほどではなかったものの、「えんぶり」と高い相関を示したことである。すなわち、評価のパターンに双方で共通性のあることを示唆していた。このことは「えんぶり」のお囃子の主役が横笛であることと関係していることを推定させるとともに、聞き慣れているという経験の要因も働いていることを示している。

「えんぶり」の音楽に対する反応は、普段受容され愛好される音楽ではないにもかかわらず高いプラスの評価であったことから、「えんぶり」音楽には、地域の人々を活性化させる効果のあることが示唆された。そうであれば、お囃子音楽の効果には地域特異的な面もまたあるように思われる。そこで、今回の研究では秋田県大館市の神明社例祭¹⁾のお囃子との比較によりその検証を試みることにした。八戸と大館は比較的近い位置関係にあるものの、奥羽山脈を以て異なる地域文化圏を形成している。この地理的文化的な違いが、祭りを違ったものに行っている²⁾。参加協力者は八戸地域とその他の地域出身者で構成されたが、後者に大館市出身者はいなかった。そこでは、八戸の出身者が「えんぶり」に最も高い評価を与えること、神明社例祭のお囃子には「えんぶり」ほどの評価ははず

¹⁾ 本研究は、一部は八戸大学の平成22年度人間健康学部・共同地域研究プロジェクトへの助成によっている。また本論は、八戸大学人間健康学部の卒業生・金真依子さんの平成21年度の卒論研究で行われたデータの収集や集計をもとにしている。記して謝意を表します。

²⁾ 大館神明社例祭はその起源が四百年以上前にさかのぼるとされる伝統的な祭りであり、大館市民の商売繁盛、家内安全などを願い、稔りの秋を祝福して開催されてきた（大館神明社祭典余興奉納実行委員会，2009）。「えんぶり」が真冬に行われるのに対して、大館神明社例祭は九月に行われる秋祭りである。また、「えんぶり」が主として「舞台」で演じられるのに対して、「例祭」の方は踊り手、小太鼓、鐘、三味線、横笛、大太鼓などのお囃子を乗せた山車（やま）の運行、みこしパレードが中心になっている。お囃子は「大館囃子」と呼ばれ四曲が伝承されている。本研究で用いた「剣囃子」はその中心になる祭り囃子である。

れの出身者からも得られないことを予想した。

方 法

協力者：八戸大学生 81 名（男性 63 名，女性 18 名，年齢 18 歳～32 歳）の協力を得た。データ処理の対象となったのはデータの整った 79 名であった。

刺激曲目：次の 4 曲を用いた。そのうちの 2 曲は先の研究（畑山ら，2009）で用いた「えんぶり 2」と，大館神社例祭のお囃子からの曲であり，その比較をとおして地域の感情反応の特異性をとらえようとした。その他の 2 曲は同じ先の研究で用いた Rameau と Bach の曲であった。4 曲に共通しているのはいずれも 18 世紀の作品と考えられる点である。しかし祭り囃子の方は，楽譜に相当するものがないために時代とともに変更が加えられてきた可能性が高いであろう。

1 曲目は Jean-Philippe Rameau（1683-1764）の雌鳥（La poula）であった。

2 曲目には，大館神社例祭の 4 曲の中から，

1	明るい	—	暗い
2	軽やかな	—	重々しい
3	騒がしい	—	静かな
4	派手な	—	地味な
5	厳しい	—	やさしい
6	動的な	—	静的な
7	すんだ	—	にごった
8	緊張した	—	弛緩した
9	浮き浮きした	—	しみじみした
10	陽気な	—	陰気な
11	激しい	—	穏やかな
12	にぎやかな	—	ひっそりとした
13	暖かい	—	冷たい
14	張り詰めた	—	ゆったりとした
15	あわただしい	—	落ち着いた
16	楽しい	—	悲しい
17	力強い	—	軽々しい
18	興奮した	—	沈静した
19	せわしい	—	のびのびした
20	いさましい	—	おとなしい
21	好きな	—	嫌いな

音楽イメージ評価項目

「剣囃子」を配置した。この曲はその昔，侍の剣の舞で奏されたとされる例祭の要となっている。

雌鳥



神社例祭



Badinerie



えんぶり



図 1 刺激楽曲の波形

3曲目はJ.S. Bach (1685-1750) のBadinerieであった。

4曲目は「えんぶり」の曲で、先の研究では「えんぶり」2である。

以上の4曲をそれぞれ約1分30秒間の提示時間になるよう全体を編集し、CD-Rにまとめて録音した。刺激楽曲の刺激波形を図1に示した。**実験用具**：参加者からの刺激曲への反応は、イメージ測定尺度へのチェックを求めることによって行った。この尺度は「音楽の印象評価の尺度リスト（七段階評定）」（菅，1996）全20項目に、「好き-嫌い」の項目を加えた「音楽イメージ評価項目」に示す21項目であった。

刺激曲の提示は八戸大学の講義用教室に備え付けの音響装置（KOWA, KSM0801A）を使用して行った。刺激提示には、教室天井の前後に設置されているスピーカー2個を用いた。また、提示直前に参加者に聞きやすい音量を求めるようにした。

手続き：実験者は参加者に対し、実験で用いる印象評価票を配布し次のように教示を行った。

「これから、音楽に関する印象評価を行っていただきます。1ページ目にある、説明と練習用の項目が記されているところを見てください。その後に記入用紙が2枚あります。全てが両面に印刷されていることを確認してください。ではまず、名前と年齢を記入してください。以下は音楽を聴いたときに想い描くイメージを言いあわす、いくつかの言葉を挙げています。その一つ一つに対応させながら、項目尺度上の適当なところに例に示すように、丸印を付けてください。」

印象評価の本試行に入る直前に記入の仕方を徹底するための練習試行を設けた。それにはエルガーの威風堂々（30秒）で行った。「始めます」で音楽を提示した。練習後、刺激曲4曲を一曲目から順番に提示し、曲毎に印象評価票に記入を求めた。各曲とも提示1分後、「聴きながら記入を始めて下さい」と伝えた。音楽が終了してから3分ほどの記入時間を設けた。参加者全

員の記入が終了したことを確認した後、同じような手順で次の曲目の提示を行った。曲間の時間間隔は約1分であった。各曲とも提示回数是一回であった。なお、教示にあたり楽曲の曲名などの情報については一切与えなかった。

データ処理：得点化するにあたり右極から各評定段階に1～7点の数値を与え、これを粗点とした。菅（1996）は左極から得点化を行っているが、本研究ではポジティブな反応に高い得点を与えるようにするため右極からの得点化を行った。統計処理にはSPSSのバージョン11.0Jを使用した。

結 果

I. 全体的結果

1. 楽曲毎の基本統計量

各項目の平均値と標準偏差値を表1に示した。それにもとづいて曲毎の全項目の平均値を図2に示した。表1から各楽曲の評価結果を見比べると次のようである。

曲全体として、先の研究結果とほぼ同様でありネガティブ評価の顕著な項目は認められなかった。次にそれぞれの曲を見てみると以下のような結果が得られた。楽曲1は、平均評定値の範囲が最低値3.4、最高値4.5で、段階尺度のほぼ中央の得点を示した。このことは評価尺度・「好き-嫌い」の結果が3.9であったことと一致した。すなわち、楽曲1はポジティブでもネガティブでもない評価がなされていた。楽曲2に関しては、最低値3.4、最高値5.4で楽曲1に比べるとレンジが大きかった。全21項目中18項目において4.0以上の評価平均であり、全体としてポジティブな評価がなされた。特に、「軽やかな」、「動的な」、「にぎやかな」、「楽しい」、などの項目得点が高かった。楽曲3は、「えんぶり」2曲とほぼ同様の得点パターンを示した。最低値4.0、最高値5.5の変動幅を示した。祭り囃子との違いは、「軽やかな」、「すんだ」、「あわただしい」といった項目に高いポジティブ評

表 1 印象評定の平均値と標準偏差値

	楽曲 1		楽曲 2		楽曲 3		楽曲 4	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
項目 1	3.5	1.3	5.0	1.1	5.1	1.1	5.2	1.1
項目 2	4.5	1.5	5.3	1.2	5.5	1.1	5.5	1.2
項目 3	3.4	1.3	5.1	1.3	4.9	1.2	5.4	1.2
項目 4	3.7	1.3	4.2	1.6	5.0	1.1	4.9	1.3
項目 5	3.6	1.2	3.9	0.8	4.0	1.1	4.1	1.1
項目 6	4.2	1.6	5.3	1.3	5.3	1.1	5.4	1.1
項目 7	4.5	1.4	4.0	1.1	4.8	1.1	4.1	1.1
項目 8	4.1	1.2	3.5	1.4	4.3	1.1	4.1	1.2
項目 9	3.9	1.4	4.8	1.5	4.9	1.1	5.0	1.3
項目 10	4.1	1.5	5.2	1.2	5.0	1.3	5.4	1.2
項目 11	3.6	1.4	4.3	1.3	4.7	1.1	5.0	1.2
項目 12	3.6	1.4	5.4	1.5	5.0	1.1	5.9	1.1
項目 13	3.6	1.2	4.9	1.1	4.4	1.1	4.7	1.1
項目 14	4.1	1.5	3.4	1.0	4.2	1.1	4.1	1.0
項目 15	4.0	1.4	4.3	1.1	5.2	1.2	4.9	1.2
項目 16	3.6	1.3	5.3	1.2	4.7	1.2	5.3	1.2
項目 17	3.6	1.3	4.5	1.4	4.1	1.3	4.9	1.3
項目 18	3.6	1.2	4.6	1.2	4.5	0.9	5.0	1.2
項目 19	4.3	1.2	4.3	1.3	4.6	1.4	5.0	1.3
項目 20	3.7	1.3	4.5	1.2	4.3	1.0	4.8	1.0
項目 21	3.9	1.2	4.3	1.3	4.2	1.2	4.3	1.2

楽曲 1:「雌鳥」、楽曲 2:「大館神明社例祭」、楽曲 3:「Badinerie」、楽曲 4:「えんぶり」

価が認められたことである。楽曲 4 は最低値 4.1、最高値 5.9 であり、他の曲に比べ全体的に高い評価が与えられていた。ポジティブ評価は、楽曲 2 と同様、「軽やかな」、「騒がしい」、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」、「楽しい」といった項目で顕著であった。楽曲 2 と楽曲 4 の「祭り囃子」に共通していたのは、騒がしく、動かつ陽気でにぎやかなことであった。

以上の記述は図 2 で確認することができた。すなわち、2 つの「祭り囃子」の評定値の項目

間変動が似ているとともに、ポジティブな評定は 2 つのお囃子音楽で高かったこと、さらに、「えんぶり」の方が「剣囃子」よりも高いことが推定できたことである。

そこで、先の研究で得られた「えんぶり 1」(先の研究の曲 2) の結果を、本研究の「剣囃子」(曲 2) と比較した。図 3 は「えんぶり」の評定値がほぼ一貫して高いことを示唆した。すなわち、U 検定の結果は「えんぶり」が「剣囃子」より評定値が高い傾向のあることを示した

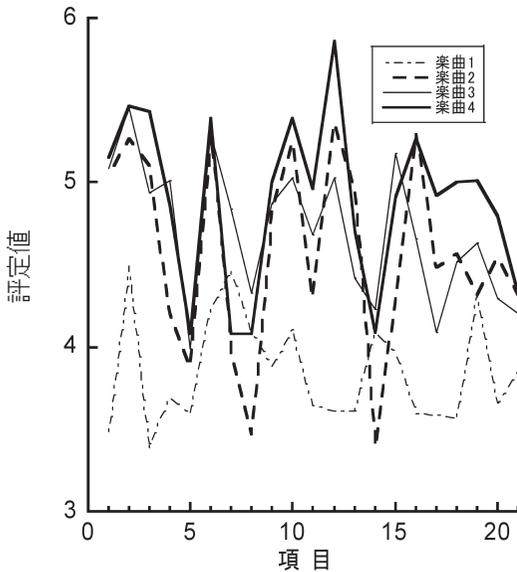


図2 各曲の項目ごとの平均評定値

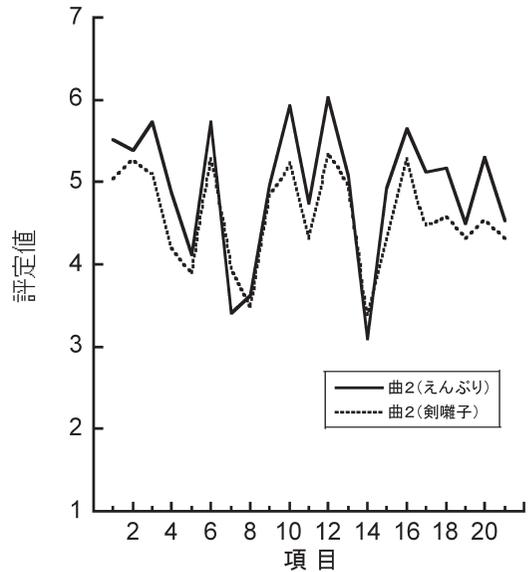


図3 2曲目が「えんぶり」の場合と「剣囃子」の場合との比較

($U=153.0$, $|z|=1.66$, $p<.10$)。このような結果は、祭りを維持する地域の人々にその‘祭り囃子への親近性’を生み出す比較的特異的な音楽的な枠組みにもとづいているように思われるところから、この点について後の分析で検討を加える。また、先の研究と同様に Badinerie は基本的に「祭り囃子」に似た評価得点を示した。以上を確認するために、次には楽曲間の類似性を検討した。

2. 楽曲間の類似性

楽曲1と楽曲2, 楽曲1と楽曲3といったように全ての楽曲を相互に組み合わせ Spearman の相関係数を求めた。表2は Spearman の相関係数の行列である。楽曲2と楽曲4の間には高い有意な相関が認められた ($r=0.869$, $p<.01$) ほか、楽曲2と楽曲3の間に有意な相関が認められた ($r=0.541$, $p<.05$)。さらに、楽曲3と楽曲4の間にも有意な相関が認められた ($r=0.686$, $p<.01$)。以上から分かるのは、「剣囃子」と「えんぶり」の2曲は高い関連性を有すること、フルートの曲・Badinerie は「祭り囃子」と高い関連性が認められたことである。

表2 Spearman の相関係数

	楽曲1	楽曲2	楽曲3	楽曲4
楽曲1		-0.172	0.280	-0.085
楽曲2			0.541*	0.869**
楽曲3				0.686**
楽曲4				

** : $p<.01$ * : $p<.05$

しかし、ハープシコードの曲・雌鳥は他のいずれとも関連性を示さなかった。

以上の結果は、祭りを持つ地域の人々の比較的特異的な反応を反映したものとも思われるところから、評価者の出身地を考慮した分析を試みた。評価者を、「3歳まで住んでいた都市」を問う質問項目への回答から、「えんぶり」の中心地「八戸」と「非八戸」に分け、二つの群を構成した。評価者数は、それぞれ22名と57名であった。まず、それぞれの平均値、標準偏差、変動係数を曲とその項目ごとに算出し、それをもとにこれまでに記した全体的結果が、出

身地域の違い、すなわち地域性の影響をどの程度受けているのかを検討することとした。

II. 八戸地域（八戸）とそれ以外の地域（非八戸）との比較

八戸と非八戸との2群間でそれぞれから得られた基本統計量の結果は、記述の全体的結果とほぼ同様であったので、ここでは曲2と曲4の結果について比較検討した結果を取り上げることとした。

1. 2曲間の地域毎の比較

八戸および非八戸の群内で曲2と曲4間の差異を調べた。項目ごとの群の平均値をもとにWilcoxon検定を行ったところ、両群ともに有意で（八戸； $|z|=3.512, p<.01$ 非八戸； $|z|=3.511, p<.01$ ）あり、ここではいずれも曲4が高い値を示した。すなわち、「えんぶり」の評定値が高いことが分かった。

2. 2群間の曲毎の比較

八戸地域出身者とその他の地域の出身者の間

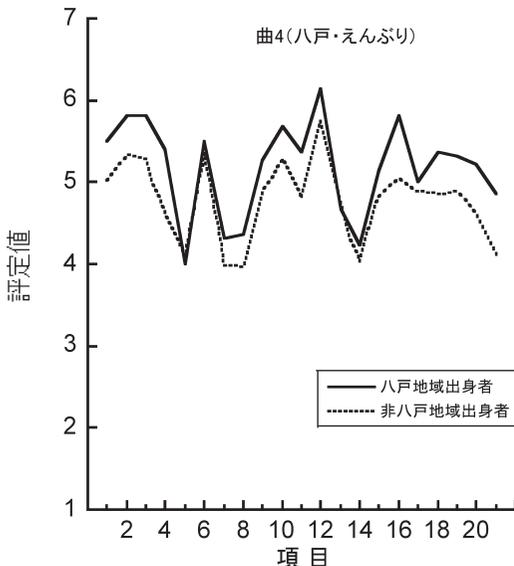


図4 八戸地域出身者とそれ以外の地域出身者の間にみられる「えんぶり」に対する評定の差異

に曲2と曲4それぞれで評定に違いがあるかどうかを調べた。U検定の結果は、曲2には二群間で差異のないことを示したが、曲4では八戸出身者が有意に高い ($U=122.0, |z|=2.479, p<.05$) ことを示した (図4)。

考 察

先の研究 (畑山ら, 2009) に引き続き本研究でもお囃子の音楽について、地域の人々にとっては意識化されることなくその響きが快いものとして内潜化しているのではないかと推定し、お囃子音楽のイメージの測定を大学生対象に試みた。測定には、音楽の印象評定のために21の対照的な形容詞項目を両極とする7段階尺度を用いた。

本研究が先の研究と異なるのは、先の研究で「えんぶり1」とした曲2を大館神明社例祭の「剣囃子」に変えたことである。これによって八戸出身者が他地域の祭りにどのような評価反応を示すのかをとらえようとした。

評価尺度の、得られた基本統計量から示唆されたことは、「祭り囃子」の2曲どちらにも、「明るい」、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」といったポジティブな評価が高いことであった。また、楽曲3・Badinerieの評定値は全体的にポジティブな傾向が認められ、「祭り囃子」の楽曲2曲にほぼ等しい評価をすることも分かった。祭り囃子との違いは、「軽やかな」、「すんだ」、「あわただしい」といった項目に高いポジティブ評価が認められたことである。これはプレストで演奏されるフルートの特徴をよく表しているように思われる。これに対して、楽曲1・雌鳥は他の3曲と異なり、全体的にはポジティブでもネガティブでもない中間的な評定がなされた。そこで、以上の結果を確認するために各楽曲間の類似性を検討したところ、楽曲1は他の3曲とは異なること、楽曲2、楽曲3、楽曲4の3曲は波形が異なるにもかかわらず相互に類似していること、特に「祭り囃子」の2曲間に

は高い相関が認められたことである。これらの結果は先の研究を裏づけるものである。

また、「祭り囃子」音楽が与える音楽効果がポジティブであったことは、Stevens & Byron (2009)の指摘からすれば、それが地域の人々にとって幼い頃から耳にすることによって、お囃子音楽の構成やならわしが暗々裏に脳裏に焼きつく過程で、なじみの響きとして心にプラスに作用するようになったからであると推定できよう(畑山ら, 2009)。このことをさらに裏づけられる結果を、本研究では先の研究と本研究の曲2の比較によって得た。すなわち、八戸地域出身者の多い大学生で構成された評価者群は、「えんぶり」の評定値が「剣囃子」のそれをほぼ一貫して上まわる値を示した。こうした結果は、祭りを持つ地域の人々の音楽に対する比較的特異的な反応を反映したものとも思われるところから、さらに評価者の出身地を考慮した分析を祭り囃子の曲2と曲4とで試みた。

八戸および非八戸の群内で曲2と曲4間の差異を調べたところ、いずれも曲4が高い値を示した。すなわち、「えんぶり」の評定値が高いことが分かった。非八戸出身者も比較的高い評価を示しているのは、八戸に住んで地元の祭りの音を聞き慣れるといった学習効果が生じたためであるのかもしれない。次いで、八戸地域出身者とその他の地域の出身者の間に曲2と曲4それぞれで評定に違いがあるかどうかを調べた。曲2には二群間で差異はなかったが、曲4では八戸出身者がそれに、より高い評価を与えることが分かった。このように、大館の剣囃子ではなく八戸の地元のお囃子によりポジティブな評価を与え、その傾向がそのお囃子の地域に育った評価者では一層著しかったことは、お囃子音楽が発達の早期から耳にするなじみの調べであることをうかがわせる。ここからさらに考えられることは、発達初期の過程での「音楽のこころ」の形成にお囃子音楽が大きい役割を果

たしていることを推測させる。そして、フルートの曲・Badenerieに評価者のほとんどがその曲を聞くのは初めてであったにもかかわらず、祭り囃子と同様な反応を示したことも、笛が主役となっている祭り囃子で形成された心理的な「音楽理論」が評価者に内潜していたからであると思われる。

本研究は、先の研究を裏づけるとともに祭り囃子に高いポジティブ評価を与える心理的メカニズムについて考察を加えた。さらに研究を進めていくためには、データを増やしながら評価項目の背後に潜む潜在的な要因を探ることによってポジティブ評価の性質を明らかにする必要があるであろう。また、他の地域の人々が「えんぶり」にどのように反応するのかを詳細に検討することも必要であろう。これにより、本研究が示唆したお囃子への地域特異的な反応についての考えを検証することができるであろう。

引用文献

- Deutsch, D. (2010) Speaking in tones, *Scientific American Mind*, 21(3), 36-43.
- 畑山俊輝・金地美知彦・深澤伸幸 (2009) 八戸民俗芸能「えんぶり」囃子の心理学的効果 八戸大学紀要, 39, 75-84
- 管 千索 (1996) 音楽における情緒的意味の測定と分析, 梅本(編) 音楽心理学の研究 第8章 第1節 pp. 224-241 京都府: ナカニシヤ出版
- North, A.C. & Hargreaves, D.J. (2008) Musical development and education. In Chapter 6 of *The Social and Applied Psychology of Music*. Oxford: OUP, pp. 313-355.
- 大館神明社祭典余興奉納実行委員会 (2009) 大館神明社例祭 祭典のしおり 第三十二集 大館市: 田村美術印刷
- Stevens, C. & Byron, T. (2009) Universals in music processing. In S. Hallam, I. Cross, & M. Thaut, *The Oxford Handbook of Music Psychology*. Oxford: OUP, pp. 14-23.

To what extent are the impression ratings to festival music locality-specific ?

Toshiteru HATAYAMA and Michihiko KANACHI

The purpose of this paper was to elucidate the extent to which psychological effects of the festival music for Hachinohe Enburi are differentiated from those in the other local areas in Japan and in some pieces of Baroque music. In this study the music 2 in our previous study (Hatayama et al., 2009), “Enburi 1”, was replaced by “Kenbayashi (sword music)” at the Oodate-Shinmeisha Festival. Eighty-one Hachinohe university students participated of 63 men and 18 women from 18 to 32 in age. They were requested to mark on 21 bipolar 7-point rating scales, the point between the two poles which is appropriate for images represented by each one of 21-pairs adjectives. Two pieces of Festival music were compared with two pieces of Baroque music, “La poula” by Rameau and “Badinerie” by J.S. Bach, used in the previous study. The result of Spearman’s coefficient of rank correlation showed that there were highly significant correlation between both of Enburi and Kenbayashi, and our raters got the impression that the two pieces of Festival music are very similar psychologically. Furthermore the fact that the effect of music 3, Badinerie, was much the same as that of the Festival music suggested that Japanese bamboo flute would play a major role in raters’ giving highly-positive ratings for the Festival music. And the subjects living in Hachinohe areas gave higher positive ratings for Enburi than for Kenbayashi : we inferred that there could be some ‘musical mind’, formed in early development, some psychological mechanism which works for generating relatively specific reactions for Festival music in the place where he or she grew up.

Key Word : Hachinohe Enburi, festival music, musical bipolar rating scale, flute